

# 「岩手銀行中ノ橋支店」は これからも。

赤レンガで知られる「岩手銀行中ノ橋支店」。美しい佇まいの洋館は、今年で築100年を迎える国の重要文化財です。

これまで銀行として地域の暮らしに寄り添ってきた建物ですが、来年6月に支店機能を隣接地に移し、内部修復や調査を行う予定とのこと。

時代と共に役割を変えながらも、地域のシンボルとしてあり続ける「岩手銀行中ノ橋支店」。

今回は普段見ることのできない建物内部と銀行の歴史についてご紹介します。



明治期の文化を感じる  
デザインと装飾

岩手銀行中ノ橋支店支店

路は、藩政時代に「札の辻」と呼ばれたお札所があった場所市が開かれ賑わい溢れた通りでした。明治期の文化を引き継ぐ建物は、さまざまな時代の変遷を経てなお、変わらぬ姿で来客者を迎えています。



岩手銀行中ノ橋支店支店長・柿木康孝さん。

長・柿木康孝さんに、建物内部を案内していただきました。銀行業務が行われている1階フロアを見渡すと、開放感ある吹き抜けを支える四方の柱には手の込んだ彫刻が施されています。天井の漆喰装飾、1階を囲むようにめぐらされた回廊それぞれに見られる明治期の西洋館独特のモダンなデザインは、当時の文化を垣間見るよう。

「建物内装の木材はそのほとんどに青森ヒバを利用しています。国有林の払い下げ木材を活用したもので、建物完成から1年ほど前、青森から丸太のまま運び込まれ、現地で加工されたようです」。

営業フロアの四方を支える4カ所の円柱8本にもヒバが使われていますが、柱にあしらった葉アザミのモチーフはギリシャ建築の特徴とのこと。重厚な建築物に柔らかな印象を加えています。なんと、館内のドアや壁面の内装部材、化粧材に使われる青森ヒバも当時のまま残っており補修の手を加えていないのだとか。細工にあたった職人の名前は明らかではありませんが、丸太の搬送からわずか1年で行われた仕事をみると、当然ながら地



現在も地域の銀行としてお客を迎える1階フロア。西洋の技術や文化を取り入れた建物には、地元資材が活かされています。

## 現役の銀行として100年

今年でちょうど100歳を迎えた赤レンガの洋館は、3年の歳月をかけて建てられ旧盛岡銀行本店として明治44年に開業しました。

今や盛岡を代表する観光スポットの一つである同建物は、東京駅の設計者として知られる工学博士・辰野金吾氏と、同じく工学博士・葛西万司氏の二人が設計を手掛けたものです。赤レンガをベースに花崗岩の白いラインがデザインのアクセントになった外観は、『辰野式ルネッサンス様式』の作品の一つ。東京駅や日本銀行本店をはじめ、全国各地に辰野式と呼ばれる多くの建物が残っており、どれもが近代建築を代表する作品なのです。また、共に設計に携わった葛西氏は岩手県盛岡市の出身で、盛岡貯蓄銀行（現盛岡信用金庫本店）や、旧盛岡劇場の建築設計も手掛けています。



元の優秀な職人が数多く関わったことが推し測られます。



各部屋の天井に施された漆喰の装飾は、一部屋ずつ違った文様が。

## 営業銀行として初の 国の重要文化財に

赤レンガの盛岡銀行は、明治期の経済発展の波に乗って誕生したのち経営に行き詰まり、昭和11年に岩手殖産銀行（現岩手銀行）の本店として新しいスタートを切りました。イメージを一新するため、レンガの外壁を白く塗ったのはこの頃のこと。以降、再度赤レンガの外観を取り戻す昭和33年まで「白い明治館」と呼ばれたそうです。昭和35年には現在の岩手銀行に行名を改称し、昭和52年1月、盛岡市の保存建造物第1号の指定を受けました。建物の建築構造が当時の特徴をほぼ完全な姿で伝えていること、そして中津川と一体となって盛岡の代表的景観を形成していることなどが指定理由に挙げられています。

さらに平成6年には、国の重要文化財にも指定を受けました。銀行の営業店舗として使用される建物では全国初のことでした。

「重要文化財に指定されたことで、建物を国の財産として保存しなくてはいけないプレッシャーもあります。日々営業店舗として使うからこそ造りの素晴らしさを感じる場面も少なくありません。

3月の地震は半分揺れがありました。暖炉の灰が落ちてきたぐらいで建物全体の損傷はありませんでした。設計や構造としてしっかりした技術のもとで造られた建物であることを改めて実感しています」と柿木さんは話します。

開放的な吹き抜けの天井は、屋根裏の

梁が支えてつりさげているとのこと。さっそうと3階から続く屋根裏へ案内していただく、そこには建設当時のまま改修の手を加えられていないという梁や筋交いがしっかりと巡らせてありました。東京駅改修工事が始まる前、関係者が参考のためにこの構造を視察に訪れたそうです。

「盛岡の市民にとって大切な財産である赤レンガの洋館を、今後永く残していくためにも、内部の修復や調査をしつかり行い、耐震補強を行っていく必要があります。移転後の活用については、まだ明確ではありませんが、営業施設でなくなれば、一般の人たちがこの場所を気軽に訪れることもできる。さらに身近な存在になってほしいと思います」。

文化庁では、昨年度から4カ年計画で同支店の調査と修復事業を進めています。レンガ造銅板葺3階建て、のべ面積1020平方メートル、約91万個の盛岡産レンガを使ったといわれる「岩手銀行中ノ橋支店」は、この街の風景に当たり前のように溶け込んでいます。



1階にみられるアーチ型の装飾もモダンな雰囲気を醸し出します。



「弧光燈（アークライト）にめくるめき

羽虫の群のあつまりつ

川と銀行木のみどり

まちはしづかにたそがるる」

宮沢賢治も好んだこの風景が、

記憶だけの宝物にならないように。

今ここに残されていることの価値を、地元住民一人ひとりも大切に考えていくべきかもしれません。

取材／SANS A企画編集委員会



明治44年5月7日、新築落成記念の写真。

### ●赤レンガ小史

明治44年 4月	盛岡銀行本店として完成 総工費13万円余
昭和 7年 5月	岩手殖産銀行創立
昭和11年12月	岩手殖産銀行本店となる
昭和35年 1月	行名改称により岩手銀行本店
昭和52年 1月	盛岡市保存建造物第1号指定
昭和58年11月	岩手銀行本店移転により同行中ノ橋支店
平成 6年12月	国の重要文化財に指定